九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

宋代私撰類書所収の白居易逸文考

陳, 翀
九州大学大学院人文科学研究院専門研究員

https://doi.org/10.15017/13185

出版情報：中国文学論集. 36, pp.42-56, 2007-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

宋代私撰類書所収の白居易逸文考

陳　翀

一　宋代の私撰類書と白居易の散逸詩文

宋代類書、特に商業目的で盛んに出版された南宋の私撰類書は、確かに体例が雑然とし、しかも重版のたびに書肆による恣意的な改編が加えられ、所載テキストの信憑性に著しく欠けるなど、様々な欠点が存在している。しかし一方、その本文に博く引用された文献資料の中に、すでに他の書籍には見ることができない、数多くの散佚詩文が残されている一面もある。その詩文補遺に対して、一貫して宋代私撰類書の使用に慎重な態度を示している『四庫全書総目提要』も、特に『海録碎事』・『錦繍万花谷』・『古今事文類聚』・『全芳備祖』に対しては、次のように高い評価を下している[1]（文中の波線は引用者による、下同）。

① 其徵摭繁富、軼聞瑣事、往往而在。頗足以資考證。（其れ徵摭繁富にして、軼聞瑣事、往々にして在り。頗る以て考証に資するに足る）（葉廷珪撰『海録碎事』）

② 特其中久經散佚之書、如『職林』・『郡閣雅談』・『雅言系述』・『雲林異景記』之類、頗賴此以存崖略。又毎類後、用『藝文類聚』例、附録詩篇、亦頗多逸章賸什、爲他本所不載。略其煩蕪、擷其精粹、未嘗不足爲考證之資也。（特其の中久しく散佚を経たるの書、『職林』・『郡閣雅談』・『雅言系述』・『雲林異景記』の如きの類は、頗る此に頼りて以て崖略を存す。又毎類の後、『芸文類聚』の例を用ひて、詩篇を附録す。亦た頗る逸章賸什多く、他本の載せざる所と為る。其の煩蕪を略して、其の精粋を擷すれば、未だ嘗て考証

の資為るに足らずんばあらざるなり）　（無名氏撰『錦繍万花谷』）

③　蓋沿用『藝文類聚』・『初學記』之體、而略變其例、所載必舉全文。故前賢遺佚之篇、間有籍以足徵者。
（蓋し『芸文類聚』・『初学記』の体を沿用し、而も其の例を略変し、載する所必ず全文を挙ぐ。故に前賢の遺佚の篇、間に籍りて以て徵するに足る者有り）　（祝穆撰『古今事文類聚』）

④　多有他書不載及本集已佚者、皆可以資考證焉。（多く他書の載せざる、及び本集の已に佚する者有り、皆以て考証に資すべし）　（陳景沂『全芳備祖』）

このように、宋代類書には、散佚した南宋以前の筆記小説を多く引用しており、それらは唐や宋の逸話や典故を把握する上での重要な資料となる。また、宋代以前の散佚詩文も数多く残存しているために、輯佚資料としても大変貴重である。かつて陳尚君氏が、『錦繍万花谷』から白居易の佚詩「任氏行」の残句を発見したことが、まさにこれらの書物を有効に利用する好例の一つとして挙げられる[2]。しかも後に、この「任氏行」詩は、『白氏文集』の成立経緯及び白居易の青年時代の行跡を探る上での、極めて重要な一作であることが、近年の静永健氏の一連の考証によって明らかになった[3]。

さて、現存する『白氏文集』の未収録作品に対する蒐集といえば、明代の胡震亨や清代の汪立名に続いて、近年、花房英樹・顧学頡・朱金城・謝思煒ら諸氏の努力によって大きな成果を得たことは、今ここに筆者が改めて縷述するまでもない。しかしながら、長年に亘って漸次完備しつつある当の補遺巻を開いてみれば、そもそも宋代の私撰類書は蒐集の範囲に入っていなかったことが明らかである[4]。宋代類書に記される文献資料の豊富さを考えると、「任氏行」以外にも、更なる白居易の散佚作品が散在していてもおかしくはないだろう。そこで本稿では、前掲の四つの類書、特に佚詩佚文の府と言われてきた『錦繍万花谷』を中心に調査を行った結果[5]、発見した白居易の散佚詩文と見られる作品について考証を加えることにする。

二　『錦繍万花谷』所収「酥香」故事考

淳熙十五年（一一八八）に成立した『錦繍万花谷』（現中国国家図書館所蔵宋刻本、以下宋刻本と略す）前集巻十七「妓妾」の部に[6]、次のような一連の条文が記されている（括弧、▲▲印、ママ字は引用者、下同）。

【阿軟】元微之到通州、見麈（ママ）間有詩。落句云、緑水紅蓮一朶開、千花萬草無顔色。不知何人題也。録此詞寄樂天、乃樂天十五年前及第時贈長安妓阿軟絶句。故白詩云、十五年前似夢遊、曾將詩句結風流。偶助笑歌嘲阿軟、那知傳誦到通州。　樂天集▲▲

【紅兒】鄜州李孝恭籍中有紅兒、善肉聲。羅虬挑之不答、遂作絶句百篇、號比紅兒詩。

【眞眞】沈眞眞、柳將軍愛妓也、以贈鄭還古。

【愛愛】錢塘楊氏也。爲張逞所携。

【酥香】唐杜祕書工於小詞。隣翁有女、小字酥香。凡才人所爲歌曲、悉能諷之。一夕、踰墻而至、杜始望不及此。隣翁失女所在。後半年、僕有過、杜笞之。竄而聞官。杜流河朔、臨行、述永遇樂一詞決別、女持紙三唱而死。　同上▲▲

ここで特に注目に価するのは、各条文の下に施された引書・作者を示す注（▲▲印を付した部分）である。前掲の『文淵閣四庫提要』には言及されていないものの、実は文淵閣『四庫全書原本提要』【巻七二子部類書類一、遼海書社】の原文には、「其れ各条の下に皆出処書名を標出す（其于各条下皆標出處書名）」と、出典を明記することを『錦繍万花谷』の一大特徴として挙げている。

さて、各条の注を確認してみよう。まず、「阿軟」の本文の下に、「楽天集」という注が見える。その条文に記されている長安の妓女阿軟をめぐる元稹・白居易の唱和故事は、現存する『白氏文集』巻十五に収める「微之到通州日…」詩（〇八五三）の詩題と詩に基づいて改編したものである[7]。よって、注の「楽天集」は、南宋初期に流布した白居易詩文集の一種であると思われる[8]。

さらに見ていくと、「阿軟」に続く「紅児」・「真真」・「愛愛」の三文の条下には何れも注が施されていない。ただ最後の「酥香」条に「同上」という注が書き添えられていることが分かる。この「同上」は、前注の「楽天集」を指すものと判断できる。[9] つまり、ここで挙げている五つの条文は、一見してすべて『錦繍万花谷』の編纂者の管見による「楽天集」より選出して概括したものと考えられる。だとすれば、残る「紅児」・「真真」・「愛愛」・「酥香」という四つの故事は、白居易の逸文なのであろうか。

ところが、その推定は誤りである。「紅児」条であるが、当該記事は、実は晩唐詩人の羅虬（生卒年不詳）の一百首連作の「比紅児詩」に纏わる逸話である。ちなみに、この詩は計有功『唐詩紀事』巻六十九に現存する。羅虬が李孝恭の幕僚になったのは、広明元年（八八〇）以後の出来事である。[10] 時に白居易の死後（会昌五年【八四六】卒）三十数年後のことである。該条の混入によって、「同上＝楽天集」という対応関係が崩壊し、『錦繍万花谷』に挙がる資料だけでは、「阿軟」以降の各条の出典を断定することは、もはや不可能である。

しかし、「愛愛」「酥香」の二つの記事は、かつて『麗情集』にも収められていたことが明らかである。[11]『麗情集』は、北宋初期の文人である張君房（生卒年不詳、景徳二年【一〇〇五】進士及第）が、晩年に古今の愛情故事を蒐集して出版した書物である。[12] 残念ながら原書はすでに散逸しており、『文苑英華』、『紺珠集』、『白孔六帖』などの類書に散在するほか、ただ一部の梗概が南宋の曽慥が編纂した『類説』巻二十九「麗情集」に纏められている。[13]

『類説』の記事を繙いて見れば、「愛愛」に関する叙述は、『錦繍万花谷』よりやや詳しいが、原作者を捜す緒口は見つからない。[14] だが、「酥香」に関する記述に、その原作者を追跡する重要な手掛かりがある。

酥香　杜祕書多情多才也、號善小詞。**元微之、所謂能道人意中語者**、信有之也。隣有富家翁姓張氏、有處子小字酥香、凡才人所爲歌曲、悉皆諷之。一夕踰垣而至、杜疑爲怪。女曰、兒乃隣家、慕郎詞章、願無棄也。杜始望不至此。黎明徙居僻地、富家翁失女、不敢自明。後十年、僕有過、杜笞之。僕以聞官、杜捕逮鞫實。除籍、流于河朔。瀕行、述承（ママ）過樂一詞訣別。女持紙三唱、絶脰（ママ）而死。

右文に傍点を附した「元微之、所謂（いわゆる）能く人の意中の語を道ふ者」の一文は、元稹の名作「鶯鶯伝」に関する最初の敷衍作品である所の南宋・趙徳麟「元微之崔鶯鶯商調蝶恋花詞」（百部叢書集成本『侯鯖録』巻五）に引用され

た次の一文を想起させる。

逍遥子曰、**樂天謂微之能道人意中語。**

逍遥子については、北宋初期の潘閬（？～一〇〇九）の号とされる。[15]「微之能道人意中語」の一文は、「所謂」という文意と関係ない助詞を除けば、『類説』の「酥香」条に傍点を附した文章と完全に合致する。しかも、逍遥子の言葉の中に、この一語を言ったのは白楽天であると明記している。これは前挙した宋刻本に示されている注文の「同上〈同白樂天集〉」とも一致する。さらに、南宋の蔡戡の「用前韻簡趙薛二丈」（四庫全書本『定齋集』巻十八）詩「暫得官閑氣味清、香閣寂寥謾隣女」の一聯の下に、「杜秘書竊鄰女酥香、後作永遇樂訣別、今所傳**香閣寂寥**是也。見麗情集」という自注が見える。この注文によって、『麗情集』に収録した「酥香」故事に、「永遇楽」という歌詩も附していたことが窺える。恐らく「長恨歌」や「鶯鶯伝」と同様に、かつて中唐に流行した歌伝体のような作品であろう。しかも、「香閣寂寥」というフレーズが、当時を風靡した流行語になったことから、白居易が綴った「酥香」故事が広く伝播して、宋代の人々に多大な影響を与えていたことも、この自注から見て取れる。

また、宋代の類書において、「同上」と注する場合、直前の条文と同じとするのが原則であり、複数の条文を含める時には、「並同上」と注記する場合が一般的である。実は、宋刻本と違う系統である嘉靖本『錦繍万花谷』前集巻十七の当該部分を確認してみると、「愛愛」と「真真」との二つの条文が載せられていないことが明らかになる。しかしなぜ、羅虬に纏わる逸話である「紅児」条が混入されたのか。芳村氏の考証によれば、成書当時の『錦繍万花谷』は、わずか二百二十八門四十巻しかなかったが、宋末まで約八十年の間に、前・後・続・別の四集一五〇巻という膨大な書物にまで増多したことが明らかになった。「紅児」条も、早い時期での重版の際に混入したものであろう。[16]宋刻本に「同上」と注したことも、当初、「酥香」は「阿軟」の直後に配されていたのではないかと考えられる。なお、宋代文人に白居易の作と見なされていた「酥香」故事が、一体どのような性質を持つ作品であるかについては、不明である。当該の作品をめぐる疑問はまだまだ山積するが、残念ながら、現段階でこれ以上の追跡は困難である。

三　元白「八月十四日翫月」次韻唱和詩考

白居易の「和微之詩二十三首　並序」の序文（『白氏文集』巻五二、二二五〇）によって、元白二人の唱和詩集である『因継集』は、大和二年（八二八）の時点で、「已に十六巻、凡そ千余首」の作品数にのぼったことが窺える。ところが、今日、花房英樹氏が復元した「元白唱和集」には、元白を併せて三百十二首【白居易一百八十五首・元稹一百二十七首】しか収めていない[17]。元白唱和詩の大量散逸は、元白唱和の実態の究明に限らず、中唐唱和文学の全体像を把握することにも、大きな支障をもたらしている。

かかる現状を踏まえて考慮すれば、満足な作品数に欠ける元白唱和詩にとって、残存する元白唱和詩の発見は、たとえ片言隻語といえども貴重な資料となる。故に、今回の宋代私撰類書に対する調査においては、筆者は元白唱和詩の蒐集にも取り組んでみた。結果を先に述べるならば、僅か一首であるが、新しい発見があった。即ち、『錦繍万花谷』後集巻一「月」の部に、次の一首の七言絶句詩が記されている。

光彩偏空輪欲満　光彩　空に偏く（あまね）　輪　満ちんと欲し
青霄映出皎雲端　青霄映出す　皎雲の端
縦饒喚得嫦娥下　縦饒（たと）へ　嫦娥の下るを喚び得るも
不許閒人取次看　閒人の取次（ずい）に看るを許さず

詩題が記されていないが、文末に「出白楽天」という注が施されている。「月」という文字を直接に用いず、「輪」や「嫦娥」などの縁語から、月が輝く夜空を詠じている詩である。また、「欲満」という言葉から、これは満月の十五夜ではなく、恐らく中秋節直前の月夜を賞嘆した歌であろう。末句の「取次」という言葉は、唐代の俗語で、「随意に、気ままに」の意であり、白居易が頻用する俗語の一つでもある[18]。注に白居易の詩作であると明記しているために、筆者はこの詩を即『白氏文集』の未収録作品であると考えたいが、前章にも言及した『錦繍万花谷』の複雑な成書経緯を考慮すれば、やはり慎重な対応が求められるであろう。

そこで、中秋直前の月を詠じる詩であることをヒントにして、宋代類書の「月」の項目や歳時記類の「中秋」の部に絞って調べたところ、宋代の蒲積中（生卒年不詳）が編纂した『歳時雑詠』【四庫全書本】巻三十「中秋」に収められる白居易の詩群に、詩題を「次韻」とする次の一首を発見した。(19)

光彩徧空輪欲満　青霄映出皎雲端
縦饒喚得姮娥下　引向堂前子細看

この一首は、末句を除いて、『錦繍万花谷』所載詩とほぼ合致する（姮娥は嫦娥の別名）。異文の存在は認めるが、前挙した『錦繍万花谷』に記載したものと同一詩であると考えられる。よって、この詩は白居易の逸詩であると断定できる。また、該詩は『全唐詩』と陳尚君『全唐詩補編』にも収められておらず、『全唐詩』補遺巻にも入れるべき一首と言える。

さらに、『歳時雑詠』に記される「次韻」という詩題から、この逸詩は白居易がある詩人の作品に応酬した和詩であることが判明する。周知の如く、次韻とは、既詠の作品の押韻字を固定したまま、全く新しい詩を創作する、中唐以後生まれてきた漢詩独特の唱和詩法である。その産みの親は、まさしく白居易と元稹に他ならない。(20)現存する白居易の次韻唱和詩も、その殆どは元稹との応酬詩である。

ここで、元稹集を確認してみると、宋代の洪适（一一一七～一一八四、字は景伯）が補遺した「集外詩」（『元稹集』巻二十六）に、詩題を「八月十四夜翫月」（〇九八五）とする白居易詩の原唱と見られる作品を発見した。

猶欠一宵輪未滿●　猶お一宵を欠け　輪未だ満ちず
紫霞紅襯碧雲端●　紫霞　紅にして　碧雲の端を襯す
誰能喚得姮娥下●　誰か能く姮娥の下るを喚び得
引向堂前子細看　堂前に引き向かひ　仔細に看んや

詩の句末字「満・端・下・看」は正確に一致する。前挙した白詩と次韻唱和詩であることは間違いない。また、『歳時雑詠』に記した白詩の末句「引向堂前子細看」は元稹詩の文字が混入したものであることが分かる。よって、『錦繍万花谷』に記される本文が正しいテキストであることも判明する。

しかも、本集から脱落した元稹詩も、同じく『歳時雑詠』巻二十九に収められている。恐らく蒲積中は、詩人の大集ではなく、元白唱和詩を書き留めた詩巻から直接にこの二つの詩を摘出したのであろう。なぜならば、まず、白詩の詩題を「次韻」に作ること、これは、元来白詩が元稹詩の末尾に記されていたためであろう[21]。また、末句の混同も、抄写時に両詩が同じところにあったからこそ生じた誤写であると思われる。

さらに、詩の内容に踏み込んで検討してみよう。中秋節の前日に、元稹は、「月はまだ円満ではないが、風情が満ち溢れている。もし誰か月の仙女である姮娥を呼んでくれれば、今夜はその美貌をゆっくり楽しみたい」と詠じ、それに対して、白居易は、「たとえ誰かが姮娥を呼んでくるとしても、我々のような人に気軽に姿を見せるわけがないだろう」と返答した。このような冗談まじりの唱和内容からみると、二人の息の合った即興であると思われる。だとすれば、白居易と元稹との二人の経歴を踏まえて考えると、この唱和詩は、永貞元年（八〇五）、二人が吏部試験に参加するために、一緒に長安の永崇里の華陽観に移り住んだ時期の作品である可能性が大きい。これは、白詩の中に自ら「閑人」と称したことからも窺える[22]。

四　宋代類書所見の白居易逸句

前文においては、『錦繍万花谷』に収録された白居易の「酥香」故事と元白の「八月十四夜翫月」次韻唱和詩について論じてきた。本章は、他の三種の類書から見出した白居易の逸句を集めて考証を加えたい。

① **霧重不勝瓊液冷　雨餘惟見玉容低**　霧重　瓊液の冷きに勝へず、雨余り　惟だ玉容の低るるを見ゆ
氷肌玉骨鍾瓊萼　雪魄蟾魂孕秀根　氷肌玉骨　瓊萼を鍾め、雪魄蟾魂　秀根を孕む

＊後二句は『全芳備祖』前集巻二「花部・牡丹」の「七言散句」の部に所収。本文の下に「白楽天」という小注が見える。清代の『御定佩文齋廣羣芳譜』巻三十四「花譜・牡丹三」の「詩散句」の部に、白居易の作としてさらに上二句を加えて記載している。内容からみると、原作は冬牡丹を詠じる七言詩であると推測できる。

② **杏園淡泊開花落**　杏園淡泊として　開花落つ

＊『全芳備祖』巻十「花部・杏花」の「七言散句」の部に所収。本文の下に「楽天」という小注が見える。

③　**銀臺南畔路　始是到人間**　銀台南畔の路、始めて是れ人間に到る

＊『海録碎事』巻四の下「樓臺門・銀臺」所収、本文の下に「白楽天詩」という小注が見える。また、北宋の王珪（一〇一九～一〇八五、字は禹玉）の「送何聖從龍圖將漕河東」詩【四庫全書本『華陽集』巻三】の末聯「毎下銀臺南畔路、風塵那復舊時同」の下に、「樂天、銀臺南畔路、始是到人間」という自注が見える。

④　**林館經春瑞氣浮　當時曾約相車遊**　林館　春を経て瑞気浮かび、当時曾て相車遊を約す

＊『海録碎事』巻十一の上「宰相門・相車」所収、本文の下に「白楽天」という小注が見える。『古今合璧事類備要』後集巻十三「相車遊」、『翰苑新書』前集巻三「曾約相車遊」、『古今事文類聚新集』【元・富大用撰】巻六「左右丞相」にも、白居易作品として引用している。また、北宋の劉敞「依韻和致政龐相公上巳約遊集禧觀不至」（百部叢書集成本『公是集』巻二十三）詩に、「琳館經春瑞氣浮、當時會約相車遊。仙花又向庭中落、宮水還縈苑外流。雲路空思攀去鶴、沙堤猶憶問行牛。明年三月芳菲在、須把蘭亭禊事脩」とある。首聯は白居易の逸句に酷似する。恐らくこれは劉敞が白居易の逸句を借用したのではなかろうか。[23] ちなみに、劉敞詩の「明年三月芳菲在」の一句も、白居易の名句である「人間四月芳菲尽」（「大林寺桃花」、『白氏文集』巻十六、〇九六九）を踏まえている。

⑤　**剪綃裁錦一重重**　剪綃裁錦　一重重

＊『古今事文類聚』後集巻三十一「花卉部・桃花」所収。本文の下に「樂天千葉桃」と注している。また、『全芳備祖』前集巻八「花部・桃花」の「七言散句」の部に、「剪綃裁錦一重重　樂天」、明・彭大翼『山堂肆考』（四庫全書本）巻一百九十八「剪綃裁錦」条に、「白樂天千葉桃詩　剪綃裁錦一重重」と記されている。

五　宋代類書の研究価値

今回は、『海録碎事』・『錦繍万花谷』・『古今事文類聚』・『全芳備祖』という四つの類書を取り上げて白居易の散

逸詩文の輯録を試みた。調査の結果、白居易の「酥香」故事と元稹に応酬した「八月十四日翫月」次韻詩、また逸句五首と合わせて七つの散逸作品を発見するに至った。決して多いとは言えないが、今後の『白氏文集』補遺巻の増補にとって有益な材料となるだろう。また、これらの逸詩句は、全て『全唐詩』や『全唐詩補編』にも言及されていないので、『全唐詩』の補遺にも役立つものと考える。

言うまでもなく、散逸詩文を漏れなく網羅するのは困難であるが、詩人別集の完成にとって非常に重要である。散逸詩文の発見によって、従来不明瞭であった詩人及びその周辺人物の動静を、はじめて把握できることも少なくない。本稿の冒頭にも言及した静永氏による白居易の逸詩「任氏行」に対する一連の研究はその好例である。

今回は紙幅の都合上、発見した逸詩文に対しては、真偽をめぐる考証に止まり、文字に込められた作者の意図や創作背景などについて、より詳細な考証を加えることができなかった。例えば、白居易の「酥香」の「能道人意中語」の一文は、以下に掲げる南宋初期の張戒（？～一一六〇？）の『歲寒堂詩話』（百部叢書集成本）巻上に繰り返されている「道得人心中事」という評語と、如何なる繋がりがあったのか。これらの資料は、従来の白居易研究に殆ど言及されていないために、今後の研究において、興味深い材料であることは違いない。

△　元白張籍詩、皆自陶（淵明）阮（籍）中出、専以道得人心中事爲工、本不以格卑。

△　張司業詩與元白一律、専以道得人心中事爲工。

△　元白張籍王建樂府、専以道得人心中事爲工。

また、確かに宋代類書には多くの誤謬が存在している。今回の調査においても数多くの誤収や異文を目にした。しかし、宋代における『白氏文集』の伝播状況から考えると、高価で大部な由緒正しい白居易の大集より、恐らく類書における抄書を通じて白居易詩文と接触した文人も多かったであろう。[21] だとすれば、現在我々が歯牙にもかけない類書中の誤収誤写は、むしろ宋代文人たちが一般に目にした白居易詩文の本文であると考えられるのである。まさにこれらの詩文に基づき、宋代における一般文人の白居易詩人像が築き上げられてきたとも言える。こう考えると、宋代類書、特に敏感に読者のニーズに合わせて改編を重ねて出版された私撰類書は、まだ十分に研究価値があると言えよう。

注

（1）『影印文淵閣四庫全書』本所収各本の提要による。

（2）『錦繍万花谷』前集巻十七「美人」所収の逸句は次の通り、「蘭膏新沐雲鬢滑、寶釵斜墜青絲髪」「褰髪尚隨雲勢動、素衣猶帶月光來」。陳尚君『全唐詩続拾』（『全唐詩補編』中華書局、一九九二年）巻二八に白居易の逸句として収録。また、朱金城『白居易集箋注』（上海古籍出版社、一九八八年）に『千載佳句』より同詩の「臙脂漠漠桃花淺、青薫微微柳葉新」と「玉爪蒼鷹雲際滅、素牙黄犬草頭飛」の二聯を収録した。謝思煒『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六年）にはこの四聯すべてを補入する。

（3）静永健「白居易の青春と徐州、そして女妖任氏の物語」（九州大学中国文学会『中国文学論集』第三十五号、二〇〇六年）及び同氏「白居易「任氏行」考」（九州大学大学院人文科学研究院『文学研究』第一〇四輯、二〇〇七年）。

（4）近刊の謝思煒氏の校注本においても、陳尚君氏が発見した「任氏行」の残句を採用したことを除けば、宋代の私撰類書を輯佚資料として使用していない。なお、『白氏文集』補遺巻の成立経緯について、花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂、一九六〇年）及び静永健「謝思煒『白居易詩集校注』の刊行を賀す」（『白居易研究年報』第八号、勉誠出版、二〇〇七年）を参照。

（5）本稿で取り上げた類書は、基本的に『影印文淵閣四庫全書』本を底本として使用する。また、次の各本を参照したが、異同がない限り、特別に標示しない。①影印宋刻本『錦繍万花谷』（北京図書館古籍珍本叢刊73、書目文献出版社。本文に宋刻本と称す）②影印明嘉靖刻秦汴本『錦繍万花谷』（上海辞書出版社、一九九二年、附引書索引。本文に嘉靖本と称す）③影印元刻本『新編古今事文類聚』［付元・富大用撰「古今事文類聚新集」］（書目文献出版社、一九九一年）④影印萬曆戊戌年刻本『海録碎事』（新興書局、一九六九年、附索隠）⑤影印明天啓鍾秀刻本『類説』（北京図書館古籍珍本叢刊62、書目文献出版社）⑥影印明鈔本『新編翰苑叢書』（北京図書館古籍珍本叢刊74、書目文献出版社）

（6）芳村弘道氏の考証によれば、日本には宋刻本より優れた宋版本が存在している。だが、本稿で取り上げた前集巻十七と後集巻一については、諸宋版本は欠落しているので、今回は、それらを使用しなかった。また、書目文献出版

社影印宋刻本の、前集巻九、十、二十、二十六～二十八、三十、三十四、そして後集總目、巻一、三十八～四十は明刻本によって補入したものである。詳しい考証は、芳村弘道「本邦伝来の宋版『錦繍万花谷』」（中国芸文研究会『学林』第二十三号、一九九六年。また同氏『唐代の詩人と文献研究』【朋友書店、二〇〇七年】所収）を参照。なお、『錦繍万花谷』序文に言及した「烏江蕭恭父、河南胡恪」という二人の人物について、提要に「不知何許人」と記されているが、明・張国維撰『呉中水利全書』（四庫全書本）巻十九に、「乾道二年【一一六六】、轉運副使姜銑開波大港、即顧會浦以入江。前進士胡恪隨司門員外郎李公傅相度開修三江」、明・張内蘊、周大韶撰『三呉水考』（四庫全書本）巻十五に、「景定三年【一二六二】胡恪、進士、開修三江水滙」という記載が見える。よって、胡恪は生涯呉中の水利事業に取り組んだ人物であることが明らかになる。これによって『錦繍万花谷』は、蘇州で刊刻したものと推測できる。

（7）「微之到通州日、授館未安、見塵壁間有數行字、讀之、即僕舊詩、其落句云、緑水紅蓮一朶開、千花百草無顔色。然不知題者何人也。微之吟歎不足、因綴一章、兼録僕詩本同寄。其詩乃是十五年前初及第時、贈長安妓人阿軟絶句。緬思往事、杳若夢中。懐舊感今、因酬長句」、「十五年前似夢遊、曾將詩句結風流。偶助笑歌嘲阿軟、可知傳誦到通州。昔教紅袖佳人唱、今遣青衫司馬愁。惆悵又聞題處所、雨淋江館破牆頭」。なお、本稿に引用した白居易詩は、四部叢刊所収那波本『白氏文集』をもとに、適宜諸本を参照し、作品番号は花房英樹『白氏文集の批判的研究』による。元稹の詩文は、冀勤校点『元稹集』（中華書局、一九八二年）、作品番号は花房英樹『元稹研究』（彙文堂、一九七七年）による。

（8）宋代文人はしばしば『白氏文集』を白楽天集と略称する。例えば、『宋史』巻二百九十八「李及伝」に、「（李及）居官數年、未嘗市呉物、比去、唯市白樂天集」という記載が見える。花房氏は、この白楽天集は杭州刊本の一種であるという考えを示している。前掲注（4）花房氏著作を参照。ただし、李及が見た「白楽天集」が、『錦繍万花谷』の引書と同一版本であるかどうかは、断定できない。

（9）「酥香」条下の注は、嘉靖本に「同楽天集」に作る。ただし、明嘉靖本に「阿軟」条の下に注が施されていない。また、「真真」と「愛愛」の二条が脱落している。

（10）王仲鏞『唐詩紀事校箋』（巴蜀書社、一九八九年）巻六十九「羅虬」に、「虬詞藻富贍、與宗人隱・鄴齊名。咸通乾符中、時號三羅。廣明庚子亂後、去從鄜州李孝恭。籍中有杜紅兒者、歌常爲副戎屬意。副戎聘鄰道、虬請紅兒歌而贈之縉綵。孝恭以副戎所盼、不令受所貺。虬怒、拂衣而起。詰旦、手刃紅兒。既而思之、乃作絶句百篇、以追其冤。號比紅詩、盛行於時。」とある。

（11）『記纂淵海』巻三十九「人倫部・女」に、「張氏有處子酥香、見才人所爲歌曲、悉能諷之。麗情集」とあり、『宋詩紀事』（銭鍾書『宋詩紀事補正』、遼寧人民出版社・遼海出版社、二〇〇三年）巻二十三「徐積・愛愛歌」の注に、「麗情集、楊愛愛、錢唐娼女也。垂髫喜歌舞。初學胡琴、數曲遂通他調。七月七日、泛舟西湖採荷香。爲金陵少年張逞所調、相攜潛遁、旅於京師。逾年、逞爲父捕去、愛留巷中。好事者百計圖之不可得。念逞之勤、感疾而亡。」とある。

（12）宋・趙希弁撰『郡齋讀書後志』（廣文書局、一九六七年）巻二、「麗情集二十巻　右皇朝張君房唐英編古今情感事」とあり、また宋・王銍『默記』（百部叢書集成本）巻下に、「張君房、字允方、安陸人。仕至祠部郎中、集賢校理。年八十餘卒。平生喜著書、如雲笈七籤・乘異記・麗情集・科名定分録・潮說・脞說之類甚衆。知杭州錢唐、多刊作大字板、携歸印行於世。」とある。

（13）程毅中「『麗情集』考」（『文史』第十一輯、中華書局、一九八一年）を参照。また、『類説』巻二十九「麗情集」所収の編目は以下の通り。「烟中仙・崔徽・灼灼・燕子樓・無雙仙客・蓮花妓・蜀妓薛濤・愛愛・酥香・燕女墳・泰娘・張好好・湖州髻髻女・三卿・題黃陵廟詩・贈妓詩・文宗詩・非烟・薛瓊瓊・柳枝娘・趙鞞姬・琴客・香兒・余媚娘」

（14）「愛愛、姓楊氏、錢唐娼女也。七夕泛舟西湖採荷香。爲金陵少年張逞所調、相攜潛遁於京師。逾二年、逞爲父捕去、後或傳逞已卒。致愛愛感念而亡。小婢錦児出其故繡手籍香囊繾綣、郁然如新。」

（15）諸田龍美「『元微之崔鶯鶯商調蝶恋花詞』訳注（下）」（『愛媛大学法文学部論集』人文学科編一八、二〇〇五年）を参照。なお、同訳註の（上）は、同誌一七に収録。

（16）前掲注（6）芳村論文を参照。また、宋代の『太平広記』や『麗情集』など小説類の書物には、原作者を明記しないことも、このような混乱を招く原因の一つであると考えられる。例えば、宋・沈括『夢溪筆談』（叢書集成本）巻

十四に、「楊大年因奏事論及比紅児詩、大年不能對、甚以爲恨。遍訪比紅児詩、終不可得。忽一日、見鬻故書者有一小編。偶取視之、乃比紅児詩也。自此士大夫始多傳之。予按、摭言比紅児詩乃羅虯所爲、凡百篇。蓋當時但傳其詩、而不載名氏。大年亦偶忘摭言所載」という記事が窺える。

(17) 前掲注（4）花房氏著作を参照。

(18) 『白氏文集』に九例を数える。平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』（同朋舎、一九八九年）を参照。また、「取次」の解釈は、江藍生・曹広順編著『唐五代語言詞典』（上海教育出版社、一九九七年）を参照。

(19) 『歳時雑詠』巻三十「中秋」に所収の白居易詩は、「中秋月」（『白氏文集』巻十六・〇九九三）、「中秋夜溢亭翫月」（原題「八月十五日夜溢亭翫月」『白氏文集』巻十七・一〇六九）、「答夢得中秋翫月見寄」（『白氏文集』巻六十四・三〇九九）、「中秋夜同諸客翫月」（原題「八月十五日同諸客翫月」『白氏文集』巻六十五・三一八二）、「次韻」（未収録）の五首である。

(20) 沈徳潜『説詩晬語』（霍松林校本、人民文学出版社、一九九八年）巻下に、「古人同作一詩、不必同韻。即同韻、亦在一韻中、不必句句次韻也。自元白創始、而皮陸倡和、又加甚矣。」とある。

(21) 例えば、現存唯一の唐鈔本元白詩巻であるフランス国立博物館所蔵『敦煌本元白詩抄』（通称『白香山詩集』）において、その和韻詩の詩題が次のように省略されている。白居易「寄元九微之」（『白氏文集』巻九・〇四二一「初與元九別後。忽夢見之。及寤而書適至。兼寄桐花詩。悵然感懐。因以此寄」）・元稹「和楽天韻同前」（『元氏長慶集』巻六・〇一一四「酬楽天書懐見寄」）。よって、本集と唱和詩巻との詩題の書き方が異なることが窺える。太田次男「フランス国立博物館所蔵『敦煌本元白詩鈔』について」（同氏『空海及び白楽天の著作に係わる注釈書類の調査研究』、二〇〇七年、勉誠出版）を参照。

(22) 「閑人」とは、唐代の俗語で、「仕事がない暇な人」という意味でよく使われている。前掲注（18）『唐五代語言詞典』を参照。また、白居易はしばしばこれを「忙人」（仕事に追い込まれている人）の反対語として使う。例えば、「閑行」（『白氏文集』巻五十五・二五三八）に、「五十年來思慮熟、忙人應未勝閑人」。本唱和詩の詩意を踏まえると、この一聯から、「たとえ美女が目の前に居ても、我々のような官位もない、お金もない人に相手にしてくれるはずが

ないでしょう」というニュアンスが読み取れる。

（23）唐末や宋代に、前人の詩句を自分の詩に嵌め込むという風潮があった。宋・葛立方撰『韻語陽秋』（上海古籍出版社、一九八四年）に、「張祜詩云、故國三千里、深宮二十年。杜牧賞之、作詩云、可憐故國三千里、虚唱歌詞満六宮。故鄭谷云、張生故國三千里、知者惟應杜紫微。諸賢品題如是、祜之詩名安得不重乎。其後有解道澄江静如練、世間惟有謝玄暉。解道江南斷腸句、世間惟有賀方回等語、皆祖其意也」。このように、巧みに前人或いは同時代の詩人の名句を自分の詩に象嵌することは、才学を誇示する一手段として認められている。また、宋代における類書の流行も、この「以才学為詩」の傾向と関連している。これについて、慈波「宋詩与類書之関係」（『涪陵師範学院学報』、二〇〇五年第六期）を参照。

（24）例えば、宋・樓鑰『攻媿集』（四部叢刊本）巻四「跋龍眠二馬」に、「余家蔵白氏長慶集久矣。近又得呉門大字本者。周伯範欲得舊本、以所蔵龍眠二馬遺余。古有妾換馬者、以書換馬者、自攻媿始博一笑。」とあり、周伯範が名馬である龍眠をもって『白氏長慶集』と物々交換することを記している。この記事からも、旧本の『白氏文集』が決して一般文人が容易に見られるものではないことが窺える。